

アメリカで感じたこと——・山田 秀 雄

(日本アフリカ学会会長)

昨秋、私はアメリカのアフリカ学会（2000人近い個人会員と500余りの団体会員）に招かれて、その第29回年次集会（マディソン）に出席、ある分科会で「日本におけるアフリカ研究の現状」について報告するとともに、この機会を利用してアメリカにおけるアフリカ研究の主要な拠点校4校のうちWisconsin, Indiana, California-Los Angeles (UCLA) の3大学のアフリカ研究センター（前の2大学ではアフリカ研究プログラム）を訪ねることができた。

この小旅行で私は、アメリカのアフリカ研究が、どの分野であれ、今日のアフリカ大陸及びアフリカ人に直接深く結びついていること、総じてプラグマティックな性格をもっていることを強く感じた。アフリカ系アメリカ人が多数いる合衆国では当然のことであろう。上記の年次集会でも、多くの分科会にはアフリカ系アメリカ人研究者とアフリカの大学の研究者とがきまって参加しており、私がのぞいたどの会場でもむんむんするような熱気を感じた。私が参加した分科会では、上述した私の報告に対して最初に質問したのは、あるアフリカの大学の若手研究者で、それは、中曽根発言をアメリカのアフリカ人、いやアフリカ人一般に対する蔑視と受けとめて、そのような発言を許している日本のアフリカ研究者は何をしていたのか、といわんばかりの詰問であった。これには、私は、改めて日本のアフリカ研究者の努力を懇切に説明したのであるが、ここではふれない。

この旅で、さらに強烈な印象を受けたのは、私のUCLA滞在中、たまたま開かれた「アフリカ開発への挑戦：世界銀行の対応」という公開討論集会（UCLAアフリカ研究センターと世銀の共催）に出たときである。世銀代表及び先進国の幾人かのいわゆる代表的論客とアフリカの若干の国の大学教授との間の討論で双方の主張がほとんどかみ合わず、イギリスの研究者によるまとめが突き放すような趣旨であったため、議場は一時騒然となった。私は寒々とした気持ちで席を立ったが、ふと気がつくやうに傍らのクネーネ教授（『帝王シャカ』の著者）が「白人は若い、若い」とつぶやいている。それを聞いて私はほっとした感じになったが、同時に、この南アフリカ出身の亡命詩人に身分保証を与えているUCLA、というよりアメリカの懐の深さに思いをはせたのであった。